

2019 アジア選手権報告書

明治安田生命 上田佳奈子

出場種目： LW4x

1. レース展開、結果

<Preliminary>

1レーンベトナム、2レーン香港、3レーン韓国、4レーンイラン、5レーン日本でスタートを切る。1レーンベトナムは2016年にアジア選手権で戦った経験、今年度世界選手権の結果からスタートが得意なことは予想していた。案の定スタートで先行を許す。後半は私たちの方が強いという自信がある。焦る必要はない。しかし予想外であったのは隣のレーンを走るイランがスタートで飛び出したこと。視界には捉え続けるもスタートで先行された差をなかなか埋めることができない。500mはイラン、日本、ベトナムがほぼ横一線で通過。2Qでもイランが落ちてくることはなく差は少し広まる。イランも必死にコールをかけ仕掛けていることが分かる。我々も750m地点で艇速を変えるためのコールを入れるも、大きく伸びれない。イランとの艇差が一瞬縮んだ1000m地点で再度コールを入れ逆転を狙う。その差は一瞬縮まるもまだ追いつけない。抜きたいところでなかなか抜けない。1500mを過ぎやっとイランとの距離が縮まってくるのが分かる。予定より早くラストスパートに入ろうと思うも先にイランのラストスパートが入る。すかさず我々もラストスパート。ここでレイトとともに艇速が一気に上がった。伸びる日本にイランが焦っているのが分かる。ラストさらにスピードを上げ必死で逆転を狙う。ほぼ同時のブザーが聞こえた。陸に上がってコーチから結果を聞かされるまで負けたと思っていたが、0.2秒差でなんとか勝っていた。

減量後初めて挑んだレースであったこともあり、コンスタントで出し切ってしまうと最後まで持つのかという不安もあったからか、中盤の仕掛けどころで大きく艇速を変化させられなかったことを反省。

<Final>

1レーン香港、2レーンベトナム、3レーン日本、4レーンイラン、5レーン韓国でスタートを切る。スタートダッシュが決まる。1本目からライバル視しているイランを引き離すことに成功。隣を走るベトナムには先行を許すも終始自分たちの漕ぎに集中することができていた。コールにクルー全員が反応する。Preliminaryでの課題であったコンスタントでの艇速変化がうまくいき、ベトナムにわずかに先行されているものの、コールを入れるたびに勇気が湧いてくる。1500m過ぎじわじわとベトナムの前へ出る。どんな状況でもクルーは落ち着いた闘志を燃やしていて本当に頼もしい。ラスト300mでラストスパートを入れる。またも艇速が上がる。そして差を広げゴール。ベトナム、イランが続いてゴール。とても白熱した大接戦であったが冷静と情熱を持って2000mで力を出し切ることができた。本当にいいレースであった。

表彰式では初めて君が代を聴き、感動を覚えた。また、イランの選手やベトナムの選手とも握手を交わしお互いに称え合うことができ、何事にも変えがたい充実感、達成感を得た。この機会、仲間、ライバルに心から感謝したい。

2. 本大会を経験して良かったこと、今後のボート人生に与える影響

1) 忠州国際ボートコースでレースができたこと

忠州国際ボートコースでのレース経験は来年 4 月のアジア・オセアニア大陸予選に出場することになった場合大変役に立つと思う。

2) アジアのボート情勢を知れたこと

中国や香港はワールドカップや世界選手権にも出場するが、イランやウズベキスタン、インド等多くの国は毎年国際大会に出場している訳ではない。そのため、4 年に一度のアジア大会以外でアジア諸国のレベルを図ることが難しい。本大会へ派遣された選手が A 代表かは定かではないが、未知であった直近のアジアのボート情勢を知ることができた。

3) 「日本選手団」を即席で形成できたこと

今回の勝因の 1 つは間違いなく自艇を使用できたことである。コンテナ輸送を成功させていただいた関係各位に感謝したい。また、コンテナ積み込みから今回派遣の他団体と協力する場面があり、前回参加時（2016 年）より一体感を持って現地入りができたように思う。現地でも毎日のリーダー連絡会を通して情報連携等も不備はなかった。もちろん、ほぼ未接触に終わってしまった団体もあったが、団長を中心に「チーム JAPAN」の形成に尽力いただいた。今後もより一体感を持ったチーム作りがなされることを願う。

4) パラ混同の大会運営を経験できたこと

私はボート競技が他スポーツに比べて秀でている点は、オリ/パラ種目のレースが同時に行われる点だと思っている。本大会も世界選手権等と同様にパラ種目と混合であった。国内大会でオリ/パラ種目混合の大規模レースはない。私が初めて国際大会に出場した時にパラと混合での大会運営を経験して、スポーツが様々な垣根を超えて楽しめるものなのだと知ったように、本大会で初めて経験したであろう多くの日本人選手が同じように刺激を受けてくれたことに期待する。

5) 国際交流ができたこと

多くの国の選手と交流することができた。言葉が通じなくても、人種や宗教が違っても同じスポーツを誠実に一生懸命やっているという共通点があれば、心を通わすことが容易であることを再認識できた。スポーツの魅力を発信していきたいと強く思った。

以上の通りレース展開、結果と本大会から得た事項、所感を報告いたします。この度の大会派遣を成功させていただいた多くの方に心から感謝申し上げます。

以上

■今日までのアジア選手権の派遣

アジアボート連盟(ARF)が主催するアジア選手権は、1985年の香港(沙田)から始まり、ほぼ2年毎に開催されてきた。一方、アジアオリンピック評議会(OCA)が主催する4年毎のアジア競技大会では第9回ニューデリー大会から始まっており、アジア全域での競技会開始は1980年代といえる訳である。

一方日本や上海また英国植民地であった地域では19世紀中頃には既に競技が始り古い歴史がある。特に五輪において日本はアジアから唯一1928年アムステルダム大会から派遣しており、国内普及度からもアジアの盟主とも言えた存在である、はずであった。

しかし1982年のニューデリーアジア競技大会では全種目金メダルは確実と意気軒高で臨んだはずがいきなりゼロ。そんなはずではないはずとの思いがJARAにあったのか1984年の全日本選手権に中国代表エイトを招待参加させているがあっさりと圧勝される。

1985年第1回アジア選手権(香港)、1986年アジア競技大会(ソウル)では金をようやく獲得するものの、以後も含めてアジアでの金メダルは残念ながら数えるほどしかない。そうこうしているうち中国は1988年ソウル五輪でアジア初の金メダル(W4+)を獲得し今やボート大国の一角である。アジアでの盟主を自負していたのにもかかわらず1999年長沼でのアジア選手権(兼2000シドニー五輪アジア大陸予選)を最後にJARA強化委員会はクルーの派遣を止めてしまったのである。日程上の都合か予算上の都合かは知らないが、これは他国からすれば「アジア全体で盛り上げていかなければいけないのに日本は何を考えているのか、アジアを軽視している」と見られても仕方がなかった。特に、選手の派遣は無くてもARF会議や審判で最低限派遣されている担当者は直接それら苦言を耳にする訳だからたまったものではない。このような背景から強化委員会ではなくやむなく国際委員会が派遣主体となった理由で、国内レガッタからクルーを選定し(自己負担となったが)派遣を再開したのが2007年ということであった。

だが中国や韓国、香港に加え東南アジアや西アジアのレベルアップが著しい昨今では、無論結果は望むべくもなくなかった。我が明治安田生命も過去3回、2007年韓国忠州(M8+他3種目)、2009年台湾宜蘭(LW2x、M2-)、2016年中国嘉興(LW4x)と出場してきたが相手にならず、前回嘉興での中国に続く銀が最高であった。

■準備

今回4度目の出場のチャンスを得て、クルー全員忠州が初めてで来季アジア大陸予選の会場でもあること、今度は金メダルを是が非でもとの思いから、我々はフル対応でいくこととした。具体的には自艇の搬送と女性トレーナーを帯同することである。

これまでの経験からもレンタル艇は、国内で使用している艇と全くの同様のスペックであれば問題ないが、アジアでのレースで欧州艇のレンタルが困難であること、スペックの事前情報も乏しくシューズやシートの形状も問題となることや更に女子軽量級では選定が限られるため極めてフィッティングが難しくなる。オールにしてもメーカーやスペック、グリップ等が違えば全くフィーリングが違ってしまう。競技力が圧倒的にあれば別だが、ハードで競技力を落としては全く勝負にならなくなってしまう。我々は経験しに行く立場ではない。

あと女子の軽量級という一番デリケートとも言える選手たちとなれば女性トレーナーの帯同は絶対必要

である。幸いにも我がチームのトレーナー望月は米国 ATC と国内看護師の両方(日本では 2 名のみ)のライセンスを保有するうえに、当然ながら英語も堪能なので国外でも大変心強い存在となり、選手に対してはそれも安心感やストレス軽減につながる。今回は我がクルーだけでなくパラの女子選手も含めて希望選手には資格を生かして対応していただけたので選手団全体にもお役に立てたと思う。

■出発まで

代表権を得た後は上田が代表遠征で居ないことから一旦クルーを解散、全日本社会人選手権を経て、猛暑の時期は転地合宿でしのぎ、9 月 10 日から再結成した。9 月 26 日に戸田からコンテナ発送(艇オール他)したあと茨城国体 W4x+を挟み、その後は到着したばかりの 4×新艇にてトレーニング。10 月 12 日深夜の台風 19 号による水害は全くの想定外で戸田コースも荒川もその後一時使用不能となったが、14 日には「海の森」に搬送し、翌 15 日から 18 日まで戸田から通いにて対応、上田が不在中の際は領木が代漕を務めて、体重調整と並行しながらトレーニングの質を維持することに努めた。限られた中ではあったが、我がチームとしてできる準備は最大限に行った。

■最後に

今回中国が不在でももの足りない思いはあるも、決勝タイムでは中国オープン W4x を上回ったので少しは留飲を下げる事ができた。日本女子としては 1999 年長沼大会以来 20 年振り、アジア競技大会においては 2010 年広州大会以来 9 年振りの金メダルだ。ただ全体結果から感じるのはアジアのレベルは相当に高まってきている。あえて世界選手権には参加せずアジア選手権に賭けていた国もある。特に女子ではイラン、ベトナムが進歩著しく結果からも侮ることなど全くできない。しかも日本シニア A フル代表がここ 2016 年五輪予選後、アジアでのレースに不参加であることは気がかりである。来年 4 月は過去にない厳しい戦いになることを覚悟せねばならない。

以上